



群馬県ユネスコ

ユネスコ群馬

No.72

群馬県ユネスコ連絡協議会

会長 関口 実 副会長 北川紘一郎・矢野 薫 事務局長 若田部茂子 事務局 群馬県教育委員会生涯学習課

つなげよう平和の心 広げようユネスコの輪



県内ユネスコ活動の底上げを！

群馬県ユネスコ連絡協議会

副会長 北川紘一郎

新年のお慶びを申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

群馬県内では一九九〇年に桐生発の「全国近代化遺産総合調査（文化庁）」が始まり、一九九〇年代に各地の文化遺産が注目され世界遺産やまちづくりの話題となり、二〇〇六年に六合村赤岩地区が「重伝建」に選定。二〇一一年に「ぐんま絹遺産（現八十四か所）」が創設され、二〇一四年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」のユネスコ世界遺産登録に湧き、二〇一五年は上州の「かかあ天下」が文化庁の日本遺産の認定を受けました。西毛地域では多胡碑など「上野三碑」が改めて評価され、東アジアの民族間交流や文化連携が、まさに古代のユネスコ精神ともいえるユネスコ記憶遺産候補として二〇一七年度登録を目指しています。これら、有形無形の上州の歴史的伝統文化遺産が大きな評価を受け、ユネスコ理念の「それぞれの地域の宝物を大切にしよう」という心に弾みが付きました。群馬県が果たした積極的な功績に敬意を申し上げます。

また、私達民間ユネスコの本会では、各事業や協会の活動に加え、二〇〇六年には「富岡製糸場世界遺産登録推進委員会」が発足し以来九年間にスタディーツアーや学習会が開催され、延べ九〇〇人を超える参

加を得て「平和拠点・富岡」への活動を進めてきました。今後は領域を広げた推進活動を考えて行きます。

同時に本会では、未来を担う子供たちに世界の平和や地球環境と共に「生きる力」を理解してもらおうと、二〇〇九年からは積極的にESD精神の下にユネスコスクール活動に邁進してきました。その結果、今までに県内十七校が加盟（現在国内では九三九校が加盟）し、二〇一五年度は本会に「ユネスコスクール委員会」も発足し前橋、藤岡、沼田、安中などの各ユネスコ協会では実践の成果と課題の発信に努力しているところです。そして二〇一四年に高崎市を会場に開催された「関東ブロックユネスコ研究会 in 群馬」では県内のユネスコ協会が一丸となって各事業の成果を上げると共に、国内各ブロック研究会の簡素化改革の先鞭を果たしました。また「両毛地区ユネスコ懇話会」では群馬と栃木の県境をまたいだ足利、佐野、開倫、桐生、太田、館林、大泉の七ユ協が十七年間の活動を継続し研鑽しています。

しかしながら、県内の各ユネスコ協会の現状を注視すると、活発な協会とそうでない協会の活動に温度差がある事に気づきます。地域特性もあると思いますが、今後は力のある協会にそのノウハウの助言を得たり日ユ協の応援を受けたり、そして「関

プロ研究会」の時のような全県団結パワーを発揮できたらと思います。

また、青年への呼び掛けや休眠状態の旧ユネスコ協会の再開を促したりすることで「県内ユネスコ活動の底上げ」につながる必要があると思います。二月に桐生で開催する「運営研修会兼事務局員研修会」においては早速これらをテーマとして議論を深めて行く事も重要かと思えます。

さて、ここで世界に目を転じると余りにも目に余る危機に瀕する地球が見えてきます。つまり国家、民族、宗教などがエゴを張り合って正当化を主張し力づくで人殺しの連鎖が続いています。世界の多くのリーダー達は己の目先に囚われ、未来の幸せを破壊し続けています。七十年前の世界大戦の反省も無く戦争が絶えません。また、科学や文明が進むほどにヒト環境が劣悪化しています。COPは二十年も論議してなお、CO2の削減の見せかけオフセットでは本質の打開策になりません。修復できない地球が加速度を増して変になっています。「ツケを削る減速社会」への意識改革と実践が急務です。

私達ユネスコ者は良識と勇気を持ってこれらにトライし、心の平和を訴え続ける必要があります。子や孫たちに少しでも安心した次代を贈りたいと思います。

今年も真に明るい幸福な未来創生に向け、皆様と共に諦めず地道に活動を継続して行こうと思えます。本年が皆様にとってご多幸である事を念じつつ年頭の挨拶といたします。